



Title	ジョルジュ・サンド『黒い町』における野心と「友情 amitié」
Author(s)	堤崎, 暁
Citation	Gallia. 2024, 63, p. 59-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95759
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジョルジュ・サンド『黒い町』における野心と「友情 amitié」¹⁾

堤崎 暁

ジョルジュ・サンドが1861年に発表した小説作品『黒い町』*La Ville noire*²⁾は、刃物製造工セテペと紙折女工トニースという若い男女の結婚をめぐる問題を中心に物語が展開される。さらにその中では、社会的地位の上昇と結婚を同時に望むがゆえに生まれるセテペの葛藤が主軸となり、商売で挫折した後の旅を経て精神的に成長したセテペが、義兄から遺産を相続して工場主となったトニースと結ばれるという幸せな結末を迎える。一人の若い労働者セテペの挫折と成長を通じた教訓譚の様相を呈する本作は、プレイヤッド版の編者も指摘する通りゾラの『ジュルミナル』(1885)よりも20年以上先んじて労働者の世界を直接扱った作品であると言え、サンド自ら「逸品³⁾」あるいは「傑作⁴⁾」であると称したもの、その単純極まる筋のせいか発表当時は批判の対象にすらならなかった⁵⁾。指物職人である友人アグリコル・ペルディギエに対して、「労働者の生活の現実的、具体的な細部」ではなく「労働の只中で開花しうる感動、感情、情熱、熱望の詩的で道徳的な縮図⁶⁾」を描き出そうとしたと作家自身が語った本作について、先行研究ではしばしば、セテペが目指すような個々人の社会的地位の上昇が否定され、トニースが実現する労働者階級全体の進歩および連帯が推奨されているという解釈が示されてきた⁷⁾。また本作は、工場経営者などのブルジョワが住む山の手の町と、労働者たちが住む谷底の町（黒い町）という明確に対比された二つの町を舞台としている。確かにこの点で、日増しに工業化が進む19世紀後半という時代において、ブルジョワによる支配に対抗する術としての労働者全体の団結をサンド流の半ばユートピア的な結末によって呼びかけた作品と捉えることができるだろう。しかし一方では、労働者とブルジョワの対立というテーマの取り扱いに関して、ゾラが社会的・政治的背景を深く掘り下げているのに対して、サンドはあくまで登場

1) 本稿はJSPS科研費T22KJ21130による研究成果の一部である。

2) 『黒い町』からの引用に際しては次の版のテキストに従い、各引用後の括弧内にページ数を記す。なお、引用中の下線は筆者によるものである。George Sand, *La Ville noire*, dans *Romans*, éd. José-Luis Diaz, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. II, 2019, p. 813-931.

3) George Sand, lettre à Émile Aucante [24 janvier 1860], *Correspondance*, éd. Georges Lubin, Garnier, t. XV, 1980, p. 664.

4) George Sand, lettre à Maurice Dudevant-Sand [27 janvier 1860], *ibid.*, p. 670.

5) José-Luis Diaz, «Notice» pour son édition de *La Ville noire*, *op. cit.*, p. 1403-1404.

6) George Sand, lettre à Agricol Perdiguier [11 février 1860], *Correspondance*, *op. cit.*, t. XV, p. 691.

7) Mary Rice-Defosse, «The woman writer and the worker : social mobility and solidarity in *La Ville noire*», dans David A. Powell (dir.), *Le Siècle de George Sand*, Amsterdam et Atlanta, Rodopi, 1998, p. 98 ; Agnese Silvestri, «Retour à l'utopie sans socialisme : *La Ville noire* de George Sand», *Revue italienne d'études françaises*, n° 3, 2013, p. 25.

人物の精神や感情の動きを強調しているという指摘も見られる⁸⁾。本稿はこの指摘と同様の視点に立ち、階級闘争の物語としてではなく、セテペという個人の心情の描写を通して人間精神を分析する物語として、『黒い町』の再読解を試みるものである。その際、おおよそ物語の流れに沿って考察を進めていくが、まず第一部では、仕事と結婚におけるセテペの願望の内実を考察し、続く第二部では、挫折を経たセテペの変化がどのように描かれているかを確認する。最後に第三部において、本作を読み解くためのキーワードであると筆者が考える「友情 amitié」の概念について、サンドの書簡や他の著作も参照しながら分析を試みることにする。

1. 野心の芽生え

前述の通り『黒い町』の物語はセテペが抱く上昇志向、つまり一介の雇われ工員としての現状を脱却し、自らが工場の主人になることを望む気持ちを中心に展開される。物語冒頭において、その願望は黒い町の住人の多くが抱きうるものであることが示される。セテペの友人ゴーシェは、山の手の町に住む工場経営者たちはみな「かつての同僚か、元親方職人の子供たち（817）」、つまり黒い町からの上昇を遂げた者たちであるとセテペに語る。

「[...] 俺たちは彼らに羨望を覚えるかもしれないが、彼らを憎むことはない。彼らが登った所に登れるかどうかは俺たち、あるいは少なくとも俺たちの何人か次第なのだから。[...] お前に話している俺もそれを夢見たことがあった！しかし、愛が俺をとらえ子供が産まれた。突出したものも持たず若くして結婚する者には、もはや窮地から抜け出す見込みはないが、妻と子供たちがいて慰めてくれる！そういうわけで、一生の間中常に同じことをするよう強いられた俺も不満を言わず現実をあるがままに受け入れられるのだ（817）」

下線部の発言からは、ゴーシェが二つの町の間に存在する格差を階級闘争のような否定的な意味で捉えているのではなく、状況次第では乗り越えられるものとして肯定的に捉えていることがよく分かる。続く箇所では、彼自身も上昇を望んだことがあるものの家族ができたことでそれを諦めたことが示されているが、「若くして結婚する者 *Celui qui se marie jeune*」のように主語を一般化して語られていることから、そのような境遇はゴーシェに限らず当時の労働者の一般的な実情であることを示唆していると捉えられる。さらに、この箇所以外でもゴーシェの発言の中では妻子の存在による困窮が度々示されるが、同時にゴーシェの性格が純粋で素直であること、家族のために働くことを喜びと感じていることが繰り返し強調される。労働者の家庭の窮状について、ゾラの『ジェルミナル』のように凄惨に描き出すのではなく、純粋な人物として創り上げたゴーシェの発言の裏でそ

8) Gislinde Seybert, «George Sand : *La Ville noire* écriture féminine ou art social ?», dans Jean-Marc Pastré (dir.), *La Ville : du réel à l'imaginaire*, Rouen, Publications de l'Université de Rouen, 1991, p. 59.

れを暗に強調していることには、サンドがペルディギエに語った本作執筆における態度が反映されていると言えるだろう⁹⁾。

ゴーシェは、自分自身については現状維持を甘受しながらもセテベの上昇志向を後押しする存在となるのだが、彼の発言を受けたセテベは貧しいトニースとの結婚を躊躇うようになる。とはいえ、このような躊躇の根源は、セテベが純粋な恋愛感情からトニースを求めていたわけではないということにあるように思われる。

「[...] 事実にせよ想像にせよ、少しずつ、トニースがいつも、より卓越していき、より学識深くなっているように俺には見えて、誰も彼女には近づけなくなった。彼女はこの町の女工たちの中で最も綺麗だと思ったし、事実、最も洗練されていて、身だしなみが良い。[...] つまり俺は、慎み深く、自分のことをとても高貴だと思っている女性に気に入られるという野心に駆り立てられたのだ。彼女に気に入られれば俺も偉くなった気になれるだろうと思っていたのだ (824-825)」

トニースの「卓越した様子 *son air distingué* (860)」は山の手町の町に住む医師アンティムも驚きを示すほどのものだが、下線部が示すように、セテベもまた彼女のことを他の女性とは一線を画す存在であると認識してきたことが分かる。これに加えて、結局は自分自身の価値を高めるためにトニースに「気に入られるという野心 *ambition*」を抱いていることを自認しており、彼がトニースとの結婚を望む気持ちには打算的な考えが内在していたと言えるだろう。

一方、トニースはセテベが富を求める野心を抱いているとして結婚を拒み、思い悩むセテベは彼女に弁解するかのように自身の上昇志向の動機を心の中で表明する。

「[...] 俺を駆り立てているのは労働に対する嫌悪ではないし、俺の理性を曇らせているのはブルジョワ的な贅沢を求める虚栄心ではない。俺の目的はそれより高尚なものだ。俺は、一生機械のように働くことに耐えられる人間ではない。少しでも気高い精神であれば隷属状態に嫌悪感を抱くものだから (835)」

9) サンドは労働者階級に属する家族が直面する窮状の改善という問題に無関心であるわけでは決してなく、1848年4月に『共和国広報』に寄せた記事においてすでにその問題に言及し、次のように語っている。-「民衆は苦しんだ。家族を養い、保護し、衣服をあてがい、教育するという自らの力を超える務めを男性は十分遂行できなかった。この務めは、家族が多い時、その全てを社会が個人に負わせたままにする時、労働者にはあまりに重いものである。休息のない労働で衰弱した老人、十分な仕事を奪われた妻、時期尚早の労働の犠牲になった子供を、共和政の社会が効果的に助けに来ることが絶対に必要である」(George Sand, «Ministère de l'intérieur» (*Bulletin de la République*, n° 12 [6 avril 1848]), dans *Politique et Polémiques : 1843-1850*, «Présentation» de Michelle Perrot, Belin, 2004, p. 392.)

このセテベの主張からは、労働そのものを拒んだり、単に裕福になることを求めたりするのではなく、「隷属状態 esclavage」、つまり毎日何も考えずに同じ作業を繰り返している状態から抜け出したいという考えが彼の上昇志向の根底にあることが分かる。このようなセテベの内面での心情の吐露は、トニーヌへの無言の釈明であると同時に、Agnese Silvestri が指摘した通り、セテベの上昇志向の正当性を読者に感じさせる機能をも果たすのである¹⁰⁾。この点からも、本作は単に労働者が持ち得る個人主義的上昇志向を排斥しているというよりもむしろ、自らの意志とは無関係に階級闘争に組み込まれてしまっている、一人の労働者に生じる自然な心の動きを巧みに描き出していると言えるだろう。

友人であるゴーシェが家族の存在ゆえに辛い境遇に忍従している一方で、家族のいないセテベは現状からの脱却を望んでいるわけだが、二人の間には家族の有無に加えてもう一点、出生地の違いという相違点が存在する。黒い町で生まれ育ったゴーシェはそこに住んでいることに誇りを抱く一方で、早くに両親を亡くして12歳の時に黒い町にきたセテベがそのような態度を示すことはない。さらに、黒い町にきたばかりの頃を思い出してセテベは次のように語る。

「[...] 何もしない退屈が働きたいという欲求をすぐに俺に与えた。俺は自分より幼い子供たちがすでに役に立っていて、自分がとても器用であるという様子を見せているのを見て妬んでいた。彼らに馬鹿にされることも少し恐れていた。しかし、競争心のおかげで恥を乗り越え、お前も知っているように、俺は自分より先に始めた子供たちと同じ速さで自分の職業を習得した (821)」

元々は子供が働かなければならない環境にはいなかったセテベだが、両親を亡くして子供も働く黒い町に来てからは自ら労働を求め、他の子供に対抗して生じる「競争心 émulation」から仕事の腕を磨いたのである。土地への愛着の薄さに加えて、セテベが元来持っていたのであろう、人より劣っていることを嫌う性格が彼の上昇志向に繋がっていると考えられる。さらに、この性格は同時に、先に見たように他の女性と比べて突出したトニーヌを求めることにも繋がっていると言える。つまりセテベは、他人より優れていることを求めるという一つの性格に端を発して、自身の地位の上昇とトニーヌとの結婚を同時に求め、両者の間で葛藤するのである。そして、このような葛藤を抱えたセテベは小さな工場のある場所に偶然行き着き、トニーヌのことは忘れて工場主になった時のことを夢想し、「上昇することを熱望する aspir[er] à monter (839)」。

2. 挫折と精神的成長

黒い町の住民ですら寄りつかない場所で「野心の魔 le démon de l'ambition (836)」に取り憑かれたセテベは、そこで「孤独の王 le roi de cette solitude (839)」になると宣言して希望を持って工場の経営を始める。しかし、後述するように彼

10) Agnese Silvestri, art. cit., p. 23.

が積極的に受け入れているように見えるこの「孤独」という要素が結果的に挫折をもたらすこととなる。一方、セテベとは対照的に、トニースは愛する黒い町にとどまり続けることを望み、周囲の人々との関わりを重んじて生きる女性として描かれる。「親切で慈悲深い性格（877）」の持ち主であり、「まるで自分自身のために生きることを放棄したかのように（877）」振る舞うトニースに対しては、老若男女問わず黒い町の皆が敬愛の念を抱くようになっていた。そして、これと同時に彼女は一層町の男性からの人気を集めるようになっており、セテベは嫉妬心も相まって再びトニースとの結婚を強く望むようになる。

セテベはこれまででなかったほどにトニースに恋するようになっていたのだが、トニースが、その優れた知性と良い振る舞いによって目を追って一層注目されるようになっていたことも言うておく必要がある。彼女はすっかり綺麗になっていて、他の女性にはないある種の雰囲気ので、セテベには誰よりも綺麗に見えていた（876）。

ここで注目すべきは、語り手が介入して言い添えている通り、トニースが一層他の女性とは一線を画すようになったという点であり、相変わらずセテベにとってはトニースが卓越した女性であるということが彼女を求める大きな要因となっていることが読み取れる。つまり、工場の所有者となり黒い町から抜け出すという労働者としての野心に気を取られて抜け落ちていたもう一つの野心、トニースの心を射止めて自分自身も偉くなるという野心がここで再び立ち現れるのである。そしてセテベは、トニースとの結婚を実現するために、慈悲深い性格のトニースが思う存分施しを与えられるよう自分自身が裕福になるという目標を掲げるに至る。つまり、当初は上昇の目的とはならなかった財を成すという願望を、この時はじめて自らの上昇の手段として抱くようになるのである。

さて、工場の経営は当初の見通しに反して早々に暗礁に乗り上げるのだが、セテベは誰にも相談することなく独り工場に引き籠もることを心に決める。そして、財を成すことの代わりに、「職人の苦労を減らす（882）」機械の発明によって、名誉を獲得してトニースを満足させることを目指し始める。

彼が続けていた栄光のための戦いは、財産のために続けた戦いよりはるかに激しく耐えがたいものだった。トニースのために裕福になることはもはや問題ではなかった。そちらは恥じることなく挫折できた。確かな能力があることをトニースに証明することが問題だった。ここで挫折すること、それは絶望だった（883）。

そもそも商売に成功して財産を築くということは、トニースとの結婚のためだけに目指していたことであった。これに対して、発明の成功によって名誉や栄光を手に入れるということは、トニースに自分を認めてもらうという目的に加えて、

卓越した女性であるトニーヌには、人より秀でた能力を持っている自分こそ相応しいのだというセテベの潜在的な矜持にも起因していると考えられる。つまりセテベにとって、自分の能力を証明できないという挫折は、トニーヌに認めてもらえないということだけでなく、自分には実現可能だと信じていた上昇への道が閉ざされてしまうということをも示すのである。こうした不安を抱えながらも、自分の能力の高さを信じるセテベは孤立無援で発明に取り組み続ける¹¹⁾。しかし、意気揚々と工場の経営を開始した時には読書や旅を通して「自分の仕事を徹底的に学ぶ (839)」ことを目標に掲げていたものの、実際はセテベにとって書物は「不可解なもの (882)」であり、独力で発明に取り組む中で彼が読書から発見したことは「自分は何も知らないということ (883)」だけであった。そして、苦境に陥りながらもなお人を頼ろうとせず孤独に向かう性格は、商売に続いて発明の失敗へとセテベを導くこととなると同時に、トニーヌを特に失望させるものであり、結婚を拒まれる大きな原因となる¹²⁾。前述の通り、セテベは他人より優れていることを強く求めるがゆえに、一介の工員としての現状からの脱却と結婚を同時に望んだと言えるが、孤独を好む性格ゆえにトニーヌから結婚を拒まれ、商売や発明にも失敗するという構図からも、本作において強調される、地位の上昇と結婚という二つの願望の密接な相関関係が確認できるだろう。

こうしてセテベが孤独な戦いを続ける一方で、トニーヌは医師アンティムから求婚されるも、セテベが苦しんでいることを理由に承諾を躊躇する。時を同じくして、別の女性との縁談の話を受けていたセテベの「トニーヌに対する好み *goût* は熱中 *passion* になっていた (891)」のだが、トニーヌの躊躇を偶然知った彼は、彼女の縁談を妨げないことを決心して「絶望で死にそうな (896)」様子で旅立つ。そしてセテベは、トニーヌへの愛を諦めるという消極的な理由から「自発的な流刑 *exil volontaire* (897)」として始めたこの旅を「自分の訓練のために利用する (897)」ことを心に決める。こうして幾つもの町を渡り歩いて旅を続け、腕を磨いていく中で、「より冷静 *froid* で賢明 *sage* (900)」になったセテベの精神には変化が現れる。訪れる先々で職人としての高い能力を認められながらも慢心することはなく、優秀な職人たちとの交流を経て「落ち着きと慎み深さ *le calme et la modestie* (900)」を取り戻し、「小さな努力を軽蔑すること、自分には位の高い人生 *de hautes destinées* が待っていると思うこと (900)」をやめるのである。つまり、黒い町に閉じ込められ、他人との関わりも断ち切って一人で苦悩と葛藤を続けてきたセテベが、そこを飛び出して他の労働者たちと接したことで、自分は上昇可能であるという自惚れを捨てることに至ったと言える。

11) 高岡尚子は、セテベの工場の前所有者であるオードベールが挫折の末に孤独に陥り、自殺を試みるまでに至ったことと比較しながら、ここでセテベが受け入れる孤独は「他者を寄せ付けないほどの強固な自己肯定感を示し、孤立した苦しみとは全く無縁である」ことを指摘している（高岡尚子「ジョルジュ・サンドの小説作品におけるユートピア空間とジェンダー：「ケア」のテーマをめぐる」『欧米言語文化研究』n° 8, 2020, p. 93）。

12) Mary Rice-Defosse は、セテベがトニーヌを愛し、彼女のために自分自身の現状を改善しようとするが故に野心が愛情に優ってしまう顛末の皮肉さを指摘する（Mary Rice-Defosse, art. cit., p. 97）。

こうして旅を続けるセテペは、ある時トニーヌが貧困と病気に苦しんでいることを知らせる手紙を受け取り、彼女が結婚しなかったことを知った喜びと共に黒い町に帰還する。そして、かつては抜け出したいと切に願っていた町だが、この時の彼の目には「その全てが崇高で甘美な光景 (906)」として映るようになる。また、セテペが不在の間に彼の工場は嵐で崩壊していたのだが、それを知った時の彼の行動は「気高い人間に値する *digne de la noble humanité* (907)」ものと描写され、自身の破産のことではなく、そこで働いていたはずの工員たちの身を真っ先に心配している。つまり、これまで欠けていた黒い町に対する愛着を持つようになり、そこから抜け出したいという気持ちから生じる上昇志向を捨て、孤独を好んでいた人物が他人への思いやりを示すようになるというように、修行の旅を経てセテペに生じた精神面の変化が、この帰郷の場面で一挙に提示されるのである。したがって、この旅はまさに、職人としてだけでなく人間としてのセテペの成長につながったと言えよう¹³⁾。

一方、仕事に関わる野心の消滅と同時に、トニーヌを求めるセテペの心情にも変化が生じている。トニーヌが病気になったというのは、実はセテペを黒い町に呼び戻すために捏造された話だった。しかし、まだそのことを知らないセテペは、帰郷するや否やトニーヌの友人リーズに対して心の内を曝け出す。

「[...] トニーヌの身体が不自由ならば、彼女の性格も変わってしまうかもしれない。しかし、分かるね、その全てが俺を尻込みさせることはない。自分が持っていると思っていた些細な財産をトニーヌに贈るために俺は戻ってきた。その財産はもうないが、俺には働く力と働く欲求が残っている。たとえ苦労で死ぬことになろうとも、トニーヌが何も苦しまず、全てを俺に背負わせてくれることを望む (912)」

この発言には、トニーヌとの結婚は自分の価値まで引き上げてくれるであろうという、以前まで抱いていたような打算は存在せず、セテペが純粹にトニーヌを愛していることが見て取れる。そして、彼の発言に対してリーズは、セテペの「友情はトニーヌの友情に相応しい (912)」ものだと分かったと応じる。「友情 *amitié*」という感情については次節で詳細に検討することとするが、実のところ、この感情はトニーヌが常々セテペに求めていたものであり、彼女はかねてから「友情によって安心して (864)」結婚したいと表明していた。つまり、リーズを介しての間接的な形ではあるにせよ、トニーヌに対する真の友情を表明したことが、セテペをトニーヌとの結婚に導いたのである。

13) サンドは、かつて職人の多くが行った「フランス巡歴 *tour de France*」の旅について、それは「仕事 *métier* においてだけでなく人生 *vie* における訓練の旅 *voyage d'instruction* でもある」と指摘する (George Sand, lettre à Adolphe Lemoine-Montigny [25 août 1853], *Correspondance*, *op. cit.*, t. XII, 1976, p. 73)。

3. 「友情 amitié」

ようやくセテベとの結婚を承諾したトニーヌだが、実は彼女は義兄からの遺産相続により大きな工場の主人となって工員たちの生活・労働環境を十全に整備したことで、黒い町の住人全体の崇拜的となっていた。また、彼女が経営する工場では工員たちが幸福と満足感と共に仕事に従事しており、図らずも彼らは、セテベが望んでいた現状からの脱却を少なからず果たしていると言える。一方、トニーヌと結婚したセテベは、工場の女主人の夫としてその環境を手に入れ、山の手の町に「上昇する (839)」という当初思い描いていた野心と形は違えど、トニーヌへの愛を放棄することなく「隷属状態 (835)」からの脱却を実現できたのである。すでに指摘したように、本作においては上昇志向と結婚という二つの願望の密接な相関関係が度々垣間見えるが、トニーヌに対する友情を示したことが結果的にこの二つの願望を実現させたことから、本作の主眼は「友情 amitié」という感情の描出に置かれていると考えられるのではないだろうか。そこでここからは、『黒い町』の中で友情はどのように描写されているのか、そして作家自身はこの感情をどのように捉えているのか、その概容の把握に取り組むこととする。

まず、前述の通り友情とはトニーヌが常々セテベに対して要求している感情であり、友情には様々な形態があると彼女は語っている。

「友情にも色々あるのです！お互いなしには生きられなくさせ、結婚に至らせる友情があり、これをあなたが私に対して抱いたことはなく、幸い私もあなたに対して抱いたことはありません。ですが、もっと穏やかで、それほど縛りつけない友情もあります。それは、相手の苦勞に興味を持たせ、相手を苦勞から助け出したいと思わせるものです (868)」

トニーヌは、生きるために相手を必要とし合い、結婚にまで至るほどの友情は自分もセテベも互いに抱いていないと語る一方で、相手を苦勞から助けようとするという別の類の友情の存在を挙げているが、こちらは広く友人や仲間の間で生まれうるものであると理解できるだろう。つまり、前者の類の友情はある種特別なものとして、後者はより幅広く生じうるものとして提示されていることが窺える¹⁴⁾。そして、孤独を好んで人を頼ろうとしないセテベの性格をトニーヌは度々咎めるが、そのような場面でもしばしば友情という感情に言及する。セテベが発明をしようと一人で悩んでいる時、トニーヌは、彼が「友情に無関心 mort à l'amitié

14) 19世紀のフランス語の辞書による定義においても、「amitié」はさまざまな場合に用いられる語であると言え、広くは性別を問わず他者に対して愛着を抱く感情、あるいはその感情によって結ばれる関係を指し、家族や友人同士の関係に限らず、恋愛関係や社交界における交際までもが含まれるとされる (Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, Gallimard/Hachette, t. I, 1956, art. «amitié» ; Paul Imbs (dir.), *Trésor de la Langue française*, Centre national de la Recherche scientifique, t. II, 1973, art. «amitié»)。また、「amitié」の定義の変遷について、16世紀から20世紀までの使用例を挙げながら簡潔に示したものとして以下が挙げられる。Alain Rey (dir.), *Dictionnaire culturel en langue française*, Le Robert, t. I, 2005, art. «amitié»。

で金銭欲のためだけに生きようとしている (884)」こと、自分たちが友情を示しているにも関わらずセテベは孤独を貫いていることに失望する様子を示す。以上のことから、トニーヌは、どのような形であれ人と人との関わりにおいて常に友情という感情を重要視する人物として描かれていると言える。

嵐によって自身の工場は失ったものの、トニーヌと暮らす「愛と友情の家 *maison de l'amour et de l'amitié* (923)」を手にしたセテベは、トニーヌの工場では講義を開いて旅の中で学んだことを他の工具に伝授するとともに、同僚たちに対して、自分が彼らの「信頼できる友人、良き兄弟 *un ami sérieux et un bon frère* (925)」であることを示す。積極的に仲間の輪に入ろうとするこのような描写や、倒壊した工場のことよりも工具の身を案じるというような先述の場面が示す様子には、セテベがこれまでの葛藤や挫折、旅での成長を経て、トニーヌの言うところの「相手を苦勞から助け出したい」と思う友情を仲間に対して示すようになったという変化が現れていると言える。以上のように、『黒い町』では物語の重要な局面において「友情 *amitié*」という語や、それを想起させる表現が使用されていることが分かり、トニーヌの発言やセテベの態度の変遷を通して臚げながらその概容を捉えることができた。しかし、どのような点においてセテベの友情は「結婚に至らせる友情」として認められたのか、そして、作家自身はこの感情について自らの見解としてはどのように説明しているのだろうか。最後に、これらの点についてサンドの自伝的作品『我が生涯の記』(1854-1855)を参照しつつ、セテベとトニーヌの間に生まれた「友情」について考察を深めることを目指す。

『我が生涯の記』の中でサンドは、親友であるフランソワ・ロリナとの間に生まれた「友情 *amitié*」について、「人生において最も貴重な恩恵¹⁵⁾」の一つと形容して多くのページを割いて語っている。

特別な共感、思考についての心地良い相互理解、あらゆることに関する評価における合致、あるいはもっと良く言うのであれば並外れた類似のおかげで、私たちが完全な友情について夢見ていたもの、つまり、その神聖さと穏やかさによって他のすべての人間の感情の外にある感情が私たちのお互いに明かされたのだ¹⁶⁾。

「特別な共感 *une sympathie particulière*」、「心地良い相互理解 *une douce entente*」、「合致 *une conformité*」、「並外れた類似 *une similitude extraordinaire*」などの表現の列挙からは、サンドがロリナに対して類まれな親近感を抱いていることが分かる。また、二人の仲は、元々は「相手が別の存在であったこと、二人の人間の内にただ一つの魂が宿っていた異なる存在であったこと¹⁷⁾」を思い出せなくなるほどにまで至ったと彼女は語る。つまり、この二人の間には、相手の存在なくして自

15) George Sand, *Histoire de ma vie*, dans *Œuvres autobiographiques*, texte établi, présenté et annoté par Georges Lubin, Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», t. II, 1971, p. 124.

16) *Ibid.*

17) *Ibid.*, p. 129.

分の存在は考えられないほどの「完全な友情 l'amitié parfaite」が生じたのである¹⁸⁾。そしてそれは、「自分と同類の人 mon pareil (833)」と結婚することを強く望むトニースがセテベに論じた、「お互いなしには生きられなくさせ [る] (868)」という特別な友情の形に非常に近いものだと言えるだろう。

さらにサンドは、ロリナと共に「モンテーニュ風の友情の規範¹⁹⁾」を作ったと述べ、習慣によって育まれる友情と選択によって芽生える友情とを区別する²⁰⁾。

私はいつも友人たち皆に、彼 [ロリナ] に対してある種の説明できない偏愛を持っていると白状していた。他の友人たちは彼と同じくらい心の中で私に敬意を払ってくれたし、私に対して献身的に振る舞ってくれた。おそらく幼少期の思い出の絆が彼らにとって私をより大切な存在としたのであろう。私にとっての彼らも同様である。しかし、私がロリナとの友情を習慣よりも選択に基づいていると見做さなければならぬのは、その絆を私とロリナが持っていない、つまり私たちの友情は25年の月日のものでしかないからである²¹⁾。

他の友人たちとロリナとの関係の違いは「幼少期の思い出の絆 le lien des souvenirs d'enfance」の有無にあるとして、「習慣 habitude よりも選択 choix」に基づいた友情で結ばれるロリナは、「説明できない偏愛 préférence inexplicable」を抱かせるのだと言う。「体質の相似 ressemblance d'organisation²²⁾」が導く「選択」が、「習慣」よりもはるかに素早く、そして強く二人を結びつけたのである²³⁾。

ここで『黒い町』に立ち戻ってみると、セテベが絶望の中で旅に出ることになった要因は、トニースが「非常に寛大な友情 l'amitié si généreuse と、心をセテベに繋ぎ留める多くの思い出 souvenirs (894)」を持つがゆえに、自分よりもセテベの幸せを優先しようとしていると彼が悟ったことであった。つまり、この時点でセ

18) サンドは、単なる「敬意 estime」から生じる友情とは別のものとして、「共感 la sympathie や本能の一致 la conformité d'instincts、外的事物から受け取る印象 l'impression、結局は互いに似ている精神の神秘的合意 l'entente mystérieuse」を持つ友情の存在を語っている (George Sand, lettre à Pierre-Jules Hetzel [24 mars 1850], *Correspondance, op. cit.*, t. IX, 1972, p. 500)。

19) George Sand, *Histoire de ma vie, op. cit.*, p. 129.

20) モンテーニュは、『エッセー』第1巻第28章「友情について」の中で、親友エティエンヌ・ド・ラ・ボエシと結ばれた友情について、「何かの機会もしくは利益のために結ばれた知友関係が親交にすぎない」普通の友情と比較しながら、彼と初めて会った時、「何かしら説明しがたい、宿命的な力」の働きによって「おたがい同士ほど近いものは何もなくなくなった」こと、二人の「相互の理解が、あまりにも急速であったことと、あまりにも早く完成の域に達したこと」を回想している (モンテーニュ『エッセー (一)』原二郎訳、岩波書店、1965年、p. 364-365)。

21) George Sand, *Histoire de ma vie, op. cit.*, p. 125.

22) *Ibid.*, p. 128.

23) この二種類の友情については書簡の中でも言及している。- 「心 cœur は選ばなかったが、状況と習慣 les circonstances et les habitudes が確立する友情があります。[...] 別の友情もあって、それは人生において選れて訪れながらもすぐに位置を占めるけれど、選択 choix とお互いの調和 convenance réciproque から生まれているがゆえに、その位置を占める運命にあるのです」 (George Sand, lettre à Eugène Fromentin [18 juin 1862], *Correspondance, op. cit.*, t. XVII, 1983, p. 139.)

セペが感じ取るトニースからの友情は、「思い出」という「習慣」に基づくもので、前述のような特別な友情とは異なるものだと考えられる。こうして、一方的に感じ取ったトニースの友情を慮って始めた旅を経て、セペは「トニースの友情に相応しい (912)」友情を持つに至り、自分の命を賭してでも彼女の「苦労 *peine*」を引き受けることを誓ったのである。この友情は一見、先に言及したようなセペが仲間を思いやる友情と同様のもののように思われ、『我が生涯の記』や書簡の中でサンドが語る、「選択」あるいは「類似」や「相似」などから生じる友情としての特質を明確に看取することも難しい。しかし、友情を示さず一人で工場に閉じ籠るセペが自分の「苦労を隠す高慢さ (884)」を持っていることをトニースが強く非難していたことを考え合わせると、彼女にとっては、単に「相手を苦労から助け出したい (868)」と思うにとどまらず、自分が抱える苦労を自ら相手に曝け出すことで相互的に苦労を共有するというのが、結婚にまで至りうる特異な友情の大きな基盤となっているとも理解できるだろう。さらに、サンド自身は『我が生涯の記』において、「友情は『愛 *amour* よりも』利害を超越したものであり、あらゆる苦労を分け合うが、全ての快樂 *plaisirs* を分け合うわけではない²⁴⁾」として、ロリナとの友情について綴った章の最後に読者に次のように語りかける。

特別な友情に対する崇拜を誓ってください。一人の友人、一人の完全な友人を持つことを免れたとは思わないでください。その人に対してあなた自身が完全であろうとするほどに愛している人、あなたにとって極めて重要な人、あなたもまたその人にとって極めて重要である人を持ってください。私たち皆が追求すべき大きな目的、それは私たちを蝕む大きな悪、つまり自己本位を自分の中で殺すことです。あなたはやがて、人が誰かにとって最高の存在になった時、すぐに全ての人にとってより良い存在になるのだと気づくでしょう²⁵⁾。

セペに友情を要求し続けるトニースの姿勢は、まさにサンドが求める「特別な友情に対する崇拜 *un culte à l'amitié particulière*」を体现し、セペが野心と挫折の末に辿り着いた精神的成長は「自己本位 *la personnalité*」を捨て去ったことによるものとも言えるのではないだろうか。そして、トニースに対して特別な友情を示したことで、彼女にとってセペは「最高の *excellent*」存在となり、黒い町の仲間たちにとって「より良い *meilleur*」存在となれたのである。

本稿では、主人公の精神的成長、とりわけ「友情 *amitié*」という感情の萌芽に着目して『黒い町』の再読解を試みた。多様な意味で捉えられる「友情」という概念は、サンド自身が言及するモンテーニュ、さらに古くはキケロやアリストテレスなどによって古来より論じられてきたものである。サンドもまた、自身の人

24) George Sand, *Histoire de ma vie*, op. cit., p. 130.

25) *Ibid.*, p. 131.

生経験と照合しながらそれを論じている。そして、『黒い町』においては、主にトニーヌの発言を通して曖昧ながらも友情という感情の形態が示されている。一見すると、友情や結婚をめぐるトニーヌとセテベによる諍いは、本稿冒頭で述べたような個人的上昇志向の否定と労働者階級全体の連帯の称揚という明確な構図の上で物語を展開させるための単なる装置でしかないように思われる。しかし、本稿で試みたように作家の自伝的作品である『我が生涯の記』と照合しながら検討することで、サンドは『黒い町』という小説作品を実験の場として、その時代を生きる一人の労働者の上昇志向をめぐる心情の描写や労働者階級の男女のやり取りを通して、この「友情」という捉えがたい概念を分析、表現しようとしたと解釈することができるのである。

(大阪大学博士後期課程在学中)